



一九四五年三月

曾山静子さん

曾山志静子さん（昭和5年生まれ）が、心に残る歴史のできごとを十四年前に書かれたものです。

桃の節句が過ぎた。

春まだ浅い昭和二十三年三月。私は、小学校高等科卒業を控えて、就職を考えてい

たが見通しはつかぬままであった。その頃、住んでいた葛飾区本旧木根側町は向こうが荒川放水路と中土手でこちら側は綾瀬川の堤防になっていた。二つの川には、歩道も付いた木造の長い四ツ木橋が架かっていた。



私の家は、下流の堤防下から少し入った所であった。堤防の上には、自動車・荷馬車、それに牛車などが往来していた。その下には人の往来する道路で、お店もところどころにあった。もう少し下流は中川と合流し、川と川に挟まれた三角州のようになっており、少し強い雨が降ると辺りは水浸しになっていた。私は五人姉妹の長女で、末の妹は当時二歳、両親と七人暮らした。父はデパートに勤めていたが、徴用令により南砂町の上陸用船艇を造る工場に働いていた。十四歳の私と十二歳の妹は共に学徒報国隊で動員された。妹は軍服のボタン付け、私は予科練（海軍飛行予科練習生）の使用する爆弾の外側を造る工場で働いた。

空襲も次第に頻繁になり、先生から田舎に親戚がいる人は縁故疎開を、ない人は学童疎開をするようにお話があった。

母が父兄会で詳しい話を聞いてきたが、どちらとも決断がつかぬまま、三月九日夜から十日にかけての大空襲に

遇った。けたたましいサイレンで起こさ

れて間もなく、空襲のサイレンが鳴り渡

り、暗がりの中、あ

わてて防空壕に駆け

込み、母娘が身を寄

せあった。防空壕は、

板塀の中の軒下に背

を屈めてやっと入れ

る程の狭い壕で、両

親が急ごしらえで掘

って造ったものだった。

今、思うとあの防空

壕は気休めであったよ

怖くなって震えがきた。

川二つ越したこちら側は火の手はどこにも見えなかった。三百機のB29が次から次へと低空から焼夷弾（高熱を出して辺りを焼き払い、人畜を殺傷する爆弾）を無差別に下町一帯に雨のように撒き散らし、火の海にした。

東京大空襲である。後日、いろいろと知る事になるが、あの時は恐ろしさが一杯でただ

啞然と堤防の上に父と妹と三人で立ち尽くしていた。炎が空高く天まで焦がしているよう

に見えた。あの光景は今でも鮮明に脳裏に焼きついたらままた忘れる事は出来ない。

大空襲後、隣組の家々では慌しく縁故疎開が始まり、両親も決心がついたのか、母の実

家のある新潟へ満員列車で避難して行った。

三月下旬の時季で道端に雪が積み上げられていた事が思い出される。

今日あるこの平和な日本は、戦争で犠牲にな

られた尊い命三百万人余りの方々あつての日

本である事を忘れてはならない。

《訂正とお詫び》

188号にて年号の記載ミスございました。下記に訂正致します。申し訳ございません。

◇昭和18年・学徒出陣・東京上野動物園で空襲時に逃げ出して危害を加える恐れがあるとい

う理由で25頭を毒殺。勘太郎月夜唄・若鷲の歌が流行。◇昭和19年・学童疎開開始。ラバウ

ル海軍航空隊・少年兵を送る歌が流行・ハチ公像回収・両国国技館が軍に接收、風船爆弾工場になる。◇昭和20年・東京大空襲・名古屋、大阪神戸大空襲・広島長崎原爆投下・日本無条件降伏、降伏文書調印・ダンチョネ節・同期の桜流行